

東京都スクールカウンセラー（臨床心理士）

金屋光彦

影の自分と解離性障害

1 影の自分

東日本大震災の被災地で遭遇した解離性健忘のケース、中学生の不登校支援に関わることになった解離性遁走、そして、解離性障害で最も重いレベルが、解離性同一性障害です。これは多重人格といわれるものと同義です。本人にとって耐えがたい体験から心の崩壊を防ぐために、無意識に切り離された感情や記憶が、その後次第に成長して別人格となって表に現れるのです。まさに、それは影の自分といってもよいでしょう。

が、今から70年ほど前、私たち人間は第二次世界大戦という大きな戦争を起こし、日本でも約300万人もの尊い命が失われました。「お国のため」という美名の下、戦争に協力しない者は非国民とされていたその当時の社会は、まさに心の影の部分に多くの人々が支配されていたといってもよいでしょう。

そして、著しく発達した今日でも、世界各国で今だに紛争が絶え間なく起こり、不幸な事態が続いています。

およそ、心理カウンセリングや心理治療と呼ばれるものも、カウンセラーの支えを得ながら、この影の自分と向き合い、それを顕在化した自分の中へ統合して、より成長した新しい自分として再構成していくプロセスであるといってもよいでしょう。

この影の自分をうまく処理できず、周囲の者や社会に投影し攻撃するという心理作用は、日常でもよく見られるものです。影の部分をどう扱うか、それは、私たち人間に突き付けられた永遠の課題なのです。

2 解離性同一性障害との出会い

私が臨床現場で、この解離性同一性障害、いわゆる多重人格のケースに初めて出会ったのは、今から12年前、2003年のことです。教室でのいじめや家庭環境の不安定さから、不登校に陥っていた中学生のケースに関わる中から知ったのです。

それは、「とても心配な生徒がいます、力を貸してほしい」と校長先生や学年主任の先生からほぼ同時に依頼を受けたケースでした。

当該生徒は、リストカットが激しく、両腕の内側だけでなく両脚の内側にも傷が広がっていました。この生徒との面接を重ねる中から、すぐ上の姉が、おびただしい数の人格が現れるという話をしてくれます。その中のBという名の人格が出ると、暴れて困る、男の手がないと

収まらずに大変になってしまい、Kという人格が出てくると外出して行方不明になる等、解離性人格障害によって、苦しむのは本人ばかりでなく周囲の者も振り回され困惑している状況が、明らかになっていきます。

その後、母親との面談を行い、4人の子どもを女手一つで育ててきたこと、今も生活に追われ、子どもの話を聞く余裕は、ほとんどない状況でした。

当該生徒の安定と不登校の克服には、学校環境の改善とともに、家庭への支援が早急に必要だとの見立てから、独立していた一番上の姉に、実家に戻ってきてもらうようお願いしました。また、40近くあった次姉の人格ですが、入院治療を経て12の人格にまとめ、最終的に4つの人格に統合されていきます。

継続的な面談と環境への働きかけによって、家庭も次第に落ち着き、いじめた男子生徒たちとの謝罪のイニシエーションを経て、彼女は立ち直っていきます。暗さ一辺倒の表情から笑顔も見られるようになり、教室復帰も果たします。あれほど目立っていた傷も、徐々に綺麗になくなっていきました。

3 子育ての重要性

当該生徒は、「切る時、ほとんど夜中。痛みは感じない…。朝になって、ああこんなに切ってしまったんだと、その時になって痛みを感じながら思うことが多い」と語ってくれたことがあります。リストカットは摂食障害の少女にもよく見られますが、「痛みはわからない」、「あまり感じない」、「ああ血が出てきたなって思うくらい」等と答える子が多い。この時すでに、意識のうえで解離を起こしているといってもよいでしょう。

解離性同一性障害に陥るケースの大部分は、その背景に心的外傷体験があります。離別による愛情剥奪や繰り返された虐待等、子どもの感じやすい心では耐え難いこれらの経験の末に、解離が生じるのです。切り離された意識と感情は、現実には生きられなかった人格の影として、思春期以降表面に現れ、本人や周囲の人たちを苦しめる事態を招くのです。

このように、乳幼児期や学童期に受けた負の痕跡は、人生や社会に多大な暗い影を落とし、不幸な兆しを広げていきます。児童虐待が史上初めて7万件を超える今、われわれ大人は、子育ての重要性を、今一度思い知る必要があるといってもよいでしょう。